## 【主題】小学５年生から考える主権者教育

## 【副題】教科横断的な実践を通して社会参画の基礎を育む実践

【学校・団体名】　石巻市立蛇田小学校
【役職名・氏名】　教　諭　齋藤　慧

### １　はじめに

公職選挙法の改正により選挙権年齢が満１８歳以上に引き下げられ、民法改正により令和４年度から成年年齢が満１８歳へと引き下げられたことで、小学校段階から児童に主権者として必要な資質・能力を身に付けさせていくことがより一層求められている。

本校は、全校７３５人の児童が在籍する石巻市内で唯一の大規模校である。令和６年度の５年生は１２６人が在籍し、様々な行事や学習で代表児童を選出したり、一つの意見に絞っていったりする活動に取り組んできた。筆者が担任した５年１組３２名にアンケートをとったところ、選挙に興味があると答えた児童は８７%、１８歳になったら選挙に必ず行くと答えた児童は９５%いた。選挙に対するイメージを聞くと、「なんだか難しそう」「政治」「好きな人に投票する」「自分が投票した人が選ばれるとうれしい」「よく分からない」といった漠然とした印象が強い結果となった。アンケート結果から、選挙に対する関心は高いものの、選挙そのものについてはよく分かっていないことが明らかとなった。また、「選挙に行って自分が入れたところで何も変わらないと思う」と考えている児童が少数ながらも一定数いることが分かった。

主権者教育の「単に政治の仕組みについて必要な知識を習得させるのみならず、主権者として社会の中で自立し、他者と連携・協働しながら、社会を生き抜く力や地域の課題解決を社会の構成員の一人として主体的に担う力を、発達の段階に応じて身に付ける」という目的は、児童にとって不可欠なものだと考える。その一方で、文部科学省から出されている主権者教育の実践事例を見ると、小・中学校で取り上げられているのは、児童会・生徒会の活動や、学級活動における話合い活動、小学校６年生の社会科の公民分野の学習等に限られている。

そこで本研究では、小学校５年生段階から主権者教育を国語科や総合的な学習の時間を中心に教科横断的に位置付け、社会参画の基礎となる資質・能力の育成を目指し、実践に至った。

### ２　目標

教科横断的な主権者教育の在り方を探ることを通して、児童の社会参画の基礎となる資質・能力を育めるようにする。

### ３　実践内容

#### （１）　国語「和の文化を発信しよう」～「５年１組ポスターNo. １選手権」の実践

本単元は、前単元で学習した「和の文化を受けつぐ～和菓子を探る」を基に、児童がそれぞれ興味をもった和の文化のテーマを設定し、ポスターを作って解説文を書くというものである。単元の最後に、「５年１組ポスターNo. １選手権」を行い、最も目的に沿ったポスターはどれかを考え投票し決める活動を取り入れた。投票という意思決定の仕組みを取り入れることで、一人一人の選択に責任が伴うことや、「自分で選ぶ」「理由をもって判断する」という主権者として必要な経験につながると考えた。その際、ポスター自体に名前を書かせないことで、ポスターの仕上がりに焦点化して選べるようにした（図１）。ポスターを選ぶ際には、①目を引く写真か、②印象的なキャッチコピーか、③テーマを連想させるレイアウトになっているか、④解説文の構成は適切かの観点に沿って、１人につき３つの作品に投票できるようにした。

この実践から、ポスターを作って終わりではなく、相手に見られることを意識し、何度も推敲しながらポスター制作に取り組む姿勢が見られた。振り返りからは、「選ぶことや誰のポスターが１位になるのか考えることが楽しかった」「選ぼうと思うと、写真やレイアウトを比べながら見ることができた」など、学習者として１票を入れることや誰かの作品を選ぶ面白さに気付く言葉が多く見られた。

図１　ポスターを選んでいる様子

### （2） 国語「提案します、一週間チャレンジ」のプレゼンテーションの実践

本単元は、学校生活をより良いものにするための取り組みを考えて提案するという内容である。プレゼンテーションは４人１グループで活動し、他のクラスの前で発表会を行い、投票によって１位を決めるようにした（図２）。投票の結果、最も支持を集めた提案を「１週間チャレンジ」として実際に実施した。本実践では、自分たちの考えを多くの人に発信し、他者の理解や共感を得るためには、根拠を示しながら伝えることが重要だと実感させることをねらいとした。そのため、「なぜその取組が必要なのか」「どのような効果が期待できるのか」を明確にし、聞き手を意識した資料づくりや印象に残る話し方の工夫を考えた。１００人以上の友達や先生の前でスピーチすることに加え、選ばれた提案は学級全体で１週間チャレンジできることから、児童の学習意欲は一層高まった。

図２　プレゼンテーションの様子

発表会では、６グループが「朝ご飯完食トライアル」や「外遊び週間」、「元気よくあいさつチャレンジ」など提案内容をプレゼンテーションした。どのグループも、相手に伝わる話し方や身振り手振り、視線の向け方などを意識しながら発表する姿が見られた。投票の結果「朝ご飯完食トライアル」が選ばれ、学級で取り組むこととなった。振り返りでは、「緊張したけれど、選ばれるように話し方や身振りを工夫した」「伝わるように何度も発表の構成を見直した」「目線に気を付けた」など相手を意識した振り返りや、「選ばれて嬉しかった。」「自分たちでルールを考えて、実際にできるのが面白いと思った」と、投票制の特性に着目した振り返りも目立った。このことから、自分の考えを相手に伝える活動と、他者の提案を比較・判断する活動を往還することで、相手意識をもって表現を工夫するとともに、根拠に基づいて提案を評価し、よりよい選択をしようとする態度の育成につながったと考える。

### （3） 学級活動「代表児童の選出の仕方や話合い活動」

「６年生を送る会」に向けて、学級で代表委員会のための代表２名を選出した。これまで、児童は誰かを代表で選ぶ場合は、①立候補、②決意表明、③投票の段階を追って代表を選出してきた。今回は、③投票の際に、「用紙に名前を書いて投票する」体験をさせるために投票ボックスを活用した（図３・４）。投票ボックスは、普段、学級会をする際に使っている意見ボックスを活用した。これまでは、顔を伏せ挙手によって決めていたが、ボックスを使って投票することによって児童も「誰かに１票を入れる」ことを意識することができた。また、選ばれた児童からも、「みんなに選ばれたからには、代表委員会で５年１組の意見をしっかり伝えてより良いものにしてきます。」と気持ちを引き締めクラスの前で発表していた。

図３・４　代表児童による決意表明と投票ボックスを使って投票している様子

### （4） 総合的な学習の時間「もしも私が市長になったら～まちの今と未来を考えよう」の実践

今の自分たちの住んでいる地域の課題を踏まえた上で、「理想の未来のまち」について考え模擬選挙を行った。地域の課題を多様な立場から自分事として捉え、様々な人々の思いを踏まえながら、よりよい地域社会の在り方について考え、主体的に判断しようとする態度を育むことをねらいとして設定した。児童は架空のまち「蛇田市」の住人となり、立候補した候補者に、石巻市の選挙で実際に使っている投票台を使って投票する。石巻市ではなく「蛇田市」と設定したのは、課題やよりよいまちにしていくことをより身近に自分事として考えられるようにしたためである。模擬選挙は、金沢市選挙管理委員会・金沢大学法学類投票行動論研究室の「主権者教育ワークショップ補助教材」を参考にして実施した。

まず、グループワークを行った。児童にそれぞれ役カードを引かせ、その役になりきって話し合う場を設定した。児童は「お父さん」「お母さん」「おじいちゃん」「おばあちゃん」「小学生」「中学生」のそれぞれの立場から困っていることや市に対する要望について考えた。話合いでは、「働くお父さんやお母さんの立場だと、給料を上げてほしい。」「光熱費を安くしてほしい。物価高で困っている」「児童を預ける場所が職場と同じだと働きやすい」「おじいちゃんやおばあちゃんの立場だと畑

を１人ずつ分けてほしい」「老人ホームなどの施設を増やしてほしい」「年金を上げてほしい」「小学生や中学生は公園や遊ぶ場所がたくさんほしい」「こわれている建物を直してほしい」など様々な意見が挙がった（図５）。役割を設定したことで、自分自身の立場だけではなく、世代や生活環境の異なる人々の思いを想像しながら考える姿が見られた。

図５　グループワークの様子

次に、個人ワークを行った。「蛇田市」の市長として、もしも自分が市長になったらどんな政策を行うか、予算１０億円の範囲内で実現できる政策を考えワークシートにまとめた（図６）。政策はそれぞれの金額が設定されている建物カードを参考にしながら考えさせた（図７）。児童は「何を優先するべきか」を考えながら政策を選択した。「公園も作りたいけれど、お金が足りない。」「病院を優先した方がみんな助かる。」など、限られた財源の中で優先順位を付ける難しさに気付く発言も見られた。行政には、全ての願いを実現することは難しく、限られた予算の中で最善の選択をする必要があることを体験的に理解することができた。

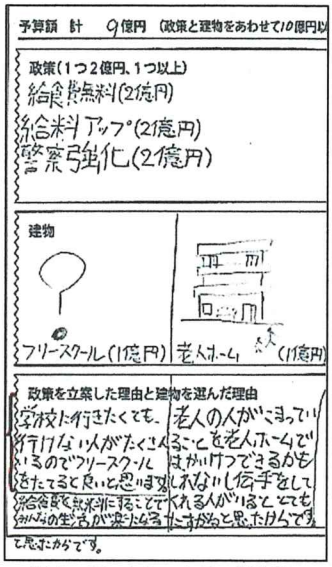


図６　ワークシートの一部抜粋

図７　建物カード

「蛇田市市長選挙」に向けて、立候補した児童は、応援人の友達１人と一緒に選挙活動を行った。立候補者と応援人はポスター制作（図８）や街頭演説を行い、「蛇田市」の市民役の５年生の友達や校長先生や職員に自分の公約を訴えた。

図８　候補者と応援人が制作した選挙ポスター

３人の選挙公約はそれぞれ以下の通りである。

| 「児童が思う存分楽しめる蛇田市」 |
| --- |
| ・児童館を作る。保護者が児童のそばにいなくても友達と楽しく過ごすことができる。さらに保護者も安心して仕事ができるようになる。<br>・公園を作る。いろいろな人たちが遊んだり体を動かしたりできる遊具などを設置することで、市民が楽しく過ごせるようになるとともに、運動不足を解消でき健康的な生活を送ることができるようになる。 |
| 「みんなが楽しく過ごせる蛇田市」 |
| ・大型の野球グラウンドを作る。小学生や中学生、高校生が野球の練習や試合ができるようになる。また、楽天イーグルスを呼んで、プロ野球の試合ができるようにする。<br>・水族館を作る。漁業が盛んな石巻を他の地域の人にアピールできる。小さい児童からお年寄りまで楽しめるまちができる。他の地域の人たちも蛇田市にたくさん観光に来てくれ、お金もたくさん使ってくれる。町が明るくなる。 |
| 「だれもが楽しく学校生活を送ることができる蛇田市」 |
| ・小学校の中に保育施設と学習支援施設を設置する。様々な年代の人との関わり方を学び、心をどんどん豊かにしていける。また、学校に行きにくい児童を支えることができる。<br>・教育に携わっている保育士や児童クラブ、学校の先生たちの給料をアップさせる。人手不足を解決し、気持ちよく働けるようにできる。そうすることで、児童にとって学校がもっと楽しい場所になる。 |

最後の選挙演説をした後、投票を行った。模擬選挙では、石巻市選挙管理委員会事務局から実際に使用されている選挙箱と記載台を借りて実施した（図９～１０）。

図９　最後に選挙演説をして市民に訴えている様子

図１０　記載台を使って投票用紙に書き、投票箱に投票している様子

模擬選挙では、教職員を含めて１４９人が投票した。選挙を通して、様々な年齢層の人たちが共に楽しく生活できる、観光資源がたくさんある等、自分たちの住んでいるまちをよりよくしていくための具体的な方法を考えることができた。選挙公約の内容と、誰が当選したのかも含めた活動内容を、石巻市政策企画課へ報告した。自分たちの学習が学校内だけで完結するものではなく、実際の行政とつながっていることを実感できる機会となった。

振り返りからは「みんなのためになる公約を考えるのは思ったより難しかった」「１０億円あれば何でもできると思ったけど、実際は足りなくて全部はできない

と分かった」「友達だからではなく、公約をよく考えて選んだ」等の記述が見られた。このことから、選挙を制度として理解するだけでなく、地域の課題を自分事として捉え、自分とは異なる立場や考えを踏まえながら、よりよい地域社会について考え、判断しようとする態度の育成につながったと考える。

## 4　成果と課題

### （1）　成果

・主権者教育は社会科や児童会活動に留まらず、国語や学級活動、総合的な学習の時間など様々な教科で実践できる可能性を示すことができた。「選ぶ」「伝える」「話し合う」「意思決定する」活動を繰り返すことで、自ら判断しよりよい選択をしようとする姿勢を身に付けた。

・自分も社会の意思決定に関わることができるという当事者意識を育むことができた。模擬選挙では、実際の投票箱や記載台を使用したことで、児童は実際の選挙に近い環境の中で投票することができた。さらに、社会や自分たちが住んでいる地域にどんな問題があるのか、その問題の解決のために有権者の一人として何ができるか考えることができた。事前アンケートでは「自分が投票しても社会は変わらない」と考える児童が一定数いたが、実践後には「自分の一票で街をよりよくできるかもしれない」「友達だからではなく、公約をよく考えて選んだ」「記載台で名前を書くとき思ったより緊張した」「自分の一票で結果が変わるかもしれないと思った。」という振り返りが複数見られた。さらに、「選挙に興味がある」と回答した児童は８７％から９２％へ増加した。このことから、児童は一票には社会をよりよくする可能性があることを実感し、主権者としての自覚を高めることができたと考える。

・多様な立場を理解しながら意思決定する態度が育った。役カードを用いた話合いや模擬選挙を通して、児童は自分だけの考えではなく、高齢者、保護者など様々な立場から地域課題を考えることができた。限られた予算の中で政策を選択する活動では、「みんなの願いを全部かなえることは難しい」という現実にも気付き、社会では多様な価値観を調整しながら解決策を見出していく必要があることへの気付きにつながった。

### （2）　課題

・模擬選挙の実践で、児童は公約の内容を比較しながら投票することができた。しかし、実現できる可能性や予算の妥当性など、根拠を基に多面的・多角的に判断する力については、さらに育成していく必要がある。今後は、算数科や社会科等の教科で資料やデータを活用しながら比較・検討する学習も取り入れていきたい。

・模擬選挙の実践では、石巻市へ伝えることをゴールにして取り組ませた。今後は、地域や行政機関との連携をさらに深め、実社会とのつながりを実感できる学習を積み重ねることで、社会参画への意識をより一層高めていきたい。

・本実践では、国語や総合的な学習の時間を中心に教科を設定して取り組んだ。他教科とも主権者教育のねらいと関連づけ実践することで、さらに主体的に社会に参画しようとする意識を育ませていくことができると考える。今後は他教科へも広げ、年間を通したカリキュラム・マネジメントとして位置付けていきたい。

## 5　終わりに

筆者は令和７年度に６年生の担任へ持ち上がった。社会科の「政治・公民」分野の学習では、選挙への関心度は非常に高かった。筆者から「なぜ、６年生で政治・公民と歴史を学ぶのか」という児童への問い掛けに対し、「これまでの過去の偉人たちの知恵や努力、過ちを学び、今ある生活に感謝するため」「今の自分を見つめ直し、将来選挙権をもったときに自分で選択できるようにするため」等、５年生で学習したことを踏まえた考えが多く挙がった。５年生の学びが６年生へとつながり、社会参画意識の基盤となっていることを実感した。

これからの社会を担う子ども達には、感性を豊かに働かせながら、社会や人生をよりよいものにするために自ら考え、答えのない課題に仲間と協働して向き合い、よりよい答えを創り出していく力が求められる。

本実践を通して、５年生においても地域の課題を自分事として捉え、多様な考えを交流しながら合意形成を図る学習を通して、社会参画への意識を育むことが可能であることが明らかとなった。今後も発達段階に応じた教科横断的な実践を継続し、主体的に社会へ参画する児童の育成を目指していきたい。

## 6　参考文献

文部科学省「主権者として求められる力」を子供たちに育むために

金沢市選挙管理委員会・金沢大学法学類投票行動論研究室「主権者教育ワークショップ補助教材」